

# 10年プロジェクトの道すがら

## — より良い知床の未来絵図 —

Road Map

Check!


<https://www.shiretoko.or.jp/activity/10years/>


10年プロジェクトの内容は知床財団のホームページから読むことができます。

## 知床財団10年構想の折り返し地点

知床財団は、設立30周年となった2018年を機に、その後の10年間の具体的な施策「10年プロジェクト」を定めました。10年プロジェクトでは、「国立公園・世界自然遺産地域の保護と利用の調和の実現」、「野生動物と折り合いをつけていく地域社会の実現」、「しれとこ100平方メートル運動の推進」、「自主・自立の旗を立てる」という4つのテーマを掲げ、10年後のより良い知床の未来を目指して、私たちが取り組むべき事業の方向性を示しています。

今年は10年プロジェクトの始動から5年目となる折り返し地点です。今回の特集では、10年プロジェクトの「今」と「未来」について、私たちの夢と希望を交えてご紹介します。

## 北海道のレンタカーにヒグマガイドブックの標準搭載を！

10年プロジェクトでは、「ヒグマ生息地における新しい公園利用のしくみづくり」として、MAAS（もっと・あかるく・あそべる・しれとこ）を掲げています。ヒグマは知床の自然の豊かさを象徴する存在ですが、その魅力ゆえに利用者による過剰な接近や、交通渋滞を引き起こしてしまう悩みのタネでもあります。道路上で多発するこのような問題の解決に向け、知床ではシャトルバスの運行と移動サービスの拡充を目指す取り組みが行われてきました。

そんな中、私たちが新たに提案したいのは、レンタカー向けのヒグマガイドブックづくり。多くの旅行者が利用するレンタカーの車内で、「クルマでクマに出会ったらどうするか」、「ヒグマの正しい生態」など、知床を訪れる前に必ず知ってほしいコトをお伝えするしくみの提案です。知床のヒグマ問題は、適切な情報提供体制が不足していることも原因の一つといえます。ヒグマの生息地を訪れる感動体験を、もっと明るく、より安全に提供するため、旅の入口での情報発信を強化していきたいと考えています。



## 普及企画係

川村喜一

## 保護管理事業係

金川晃大



## ヒグマと共存する知床をめざして

ヒグマが高密度で生息する知床国立公園では、観光客とヒグマとの間で生じるトラブルが毎年多く発生しています。観光客の方々に知床国立公園がヒグマの生息地であることを理解していただき、より安全に知床の自然を楽しんでいただけるよう、野生動物との距離感を普及啓発する「知床ディスタンスキャンペーン」や、国立公園の利用システムを改善するアクセスコントロールの取り組みと連携して、最前線でヒグマと人のあいだに立ち、人と野生動物が共存できる知床国立公園を目指していきます。

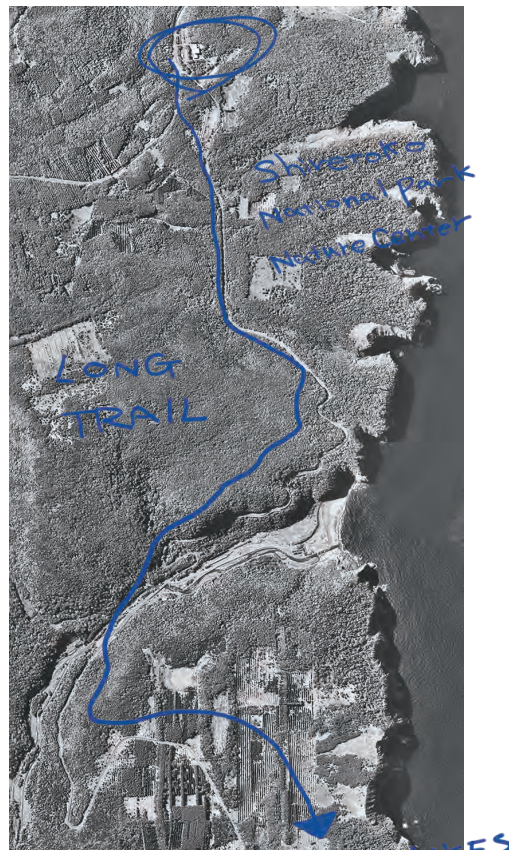
また、ヒグマの生息域である斜里町や羅臼町では、毎年ヒグマが市街地に侵入するケースが何件も発生しています。ヒグマの侵入を防ぐ電気柵のメンテナンスをはじめ、地域住民の方々の協力を得ながら、ヒグマが潜むことができる藪の草刈りやヒグマ対策ゴミステーション「とれんべア」の増設を積極的に進め、ヒグマを呼び寄せない、住民が安心して生活できる「ヒグマに強い街づくり」を目指します。

## 「森づくりの道」ロングトレイル構想！

私たちは、知床でかつて開拓された土地を原生的な自然へ還元する「しれとこ100平方メートル運動」の現地業務を担っています。原生的な自然が還元されるまでには200年300年と、人の寿命をはるかに越える時間を要するとも言われており、「森づくり」作業を地道に進めると同時に、世代を越えて支援し続けてもらえる「人づくり」も進めなければなりません。

10年プロジェクトでは、自然復元の作業地を一般公開しているトレイル「森づくりの道」の拡充を図り、多くの方々に利用してもらうことで、支援の輪を広げる人づくりを進めています。近年の取り組みでは、森づくり作業を解説するセルフガイド看板を設置したり、間伐材から造ったウッドチップを敷設したりして、トレイルの魅力向上を図っています。

長期的な目標として、森づくりの道を知床自然センターから知床五湖までつなぐロングトレイル構想があります。ロングトレイルを案内する「100平方メートル運動公認ガイド」のような仕組みが実現できれば、運動支援者の拡大のみならず、地域観光の大きな魅力にもなり得ると、夢を膨らませながらプロジェクトを進めています。



## 自然還元事業係

中西将尚



知床財団のスタッフは普段どんな仕事をしているの？  
あまり知られていない日々の取り組みをご紹介します。



## 活動日記 知床財団



### 世界自然遺産の5地域が屋久島に集結

2023年は、屋久島と白神山地が世界自然遺産に登録されて30周年の年です。

これを機に、日本国内に5か所ある自然遺産地域が集まり「世界自然遺産5地域会議」を発足することになり、私たちもはるか2,000km先の屋久島まで飛んでいきました。

会議では、各地域から市町村長、担当の方々総勢25名が集い、各地で抱えている課題や地域の未来の話など、バラエティあふれる情報が飛び交いました。同時開催されたシンポジウムでは知床のオリジナル映像「知床の冒険」を特別に屋久島で上映、今津監督のトークイベントも開かれ、北と南の素敵なコラボレーションが実現しました。



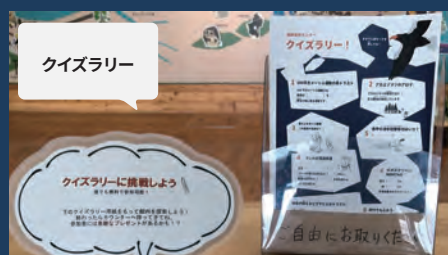
### 冬の知床自然センターを楽しもうキャンペーン

知床の冬は、景勝地や道路が冬季閉鎖していることもあり、流氷がある時期を除くと、夏場に比べて足を運んでくださるビジターは少なくなります。時には知床自然センターの1日の来館者数が50人を切ることも…（繁忙期は1日2500人を超えます）。

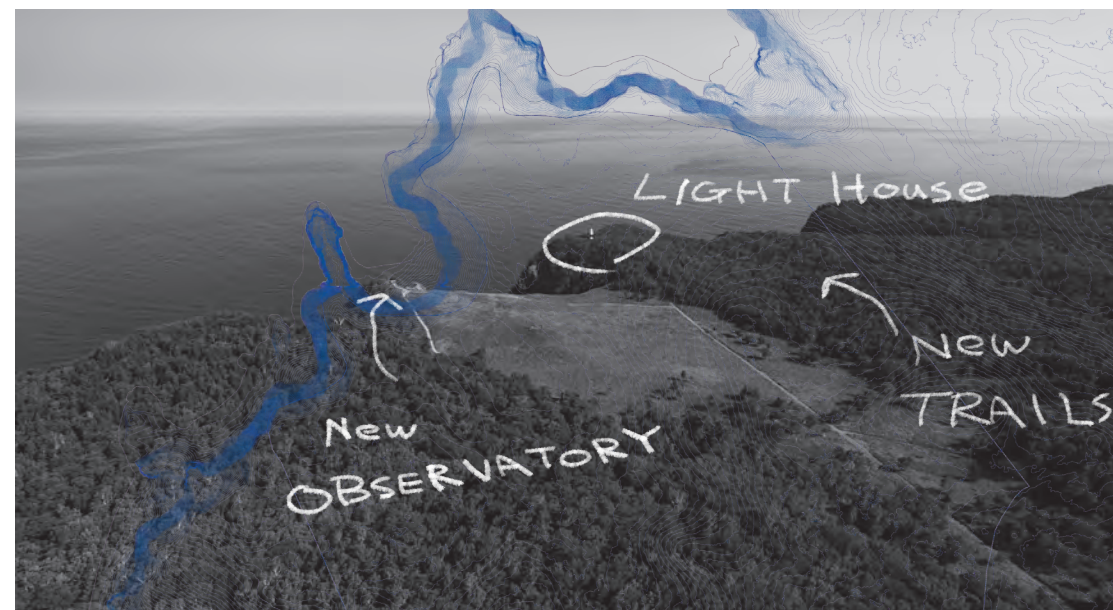
しかし、冬の知床だからこそ体感していただきたい魅力や楽しめるアクティビティはたくさんあります！

1人でも多くの方に知床の冬をお楽しみいただくため、知床自然センターでは毎年様々な企画を実施しています。今年は、「冬限定のスタッフトーク」「知床自然センタークイズラリー」を実施。さらに、西表島の世界遺産を描いたドキュメンタリー作品「生生流転」をKINETOKOで特別に上映し、多くの方にお楽しみいただきました。

来年も知床の冬をさらに魅力をお届けしていきますので、楽しみにお待ちください！



## ホロボツ園地<sup>Reborn</sup>再整備プロジェクト

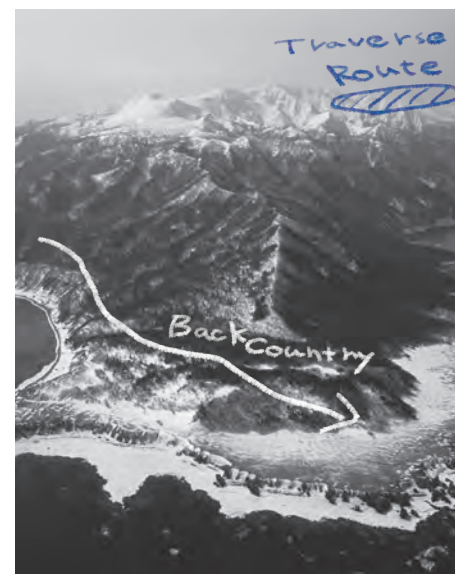


知床自然センターとホロボツ園地は、国立公園のエントランスであり、私たちの活動拠点でもあります。1988年のオープン以来、すでに30年以上が経過しました。2015年からは知床自然センターのリニューアル事業に着手し、施設のリノベーション、サービスの刷新、大型映像の更新事業などに取り組んできました。

10年プロジェクトでは「ホロボツ Reborn」として、ホロボツ地区の魅力の再発見と再生を目標に掲げています。施設のリニューアルに続き、ビジターの目的そのものである自然体験のフィールドを再整備し、その魅力を高めるのが次の目標です。

私たちの夢は、1～2時間で気軽に楽しめるコースから、数日間を要するロングトレイルまで知床自然センターを拠点とした多様なトレイルのネットワークを作ることです。現在は、フレペの滝遊歩道を中心としたホロボツ園地リニューアルの計画づくりに、斜里町とともに取り組んでいます。

老朽化したフレペの滝展望台は、ダイナミックな景観を体感できる施設に再整備し、現在立入禁止となっている灯台の活用も検討しています。コースも延長し、体力や経験に応じたバリエーション豊かな自然体験の機会を提供したいと考えています。



### るかい 艦權の立たぬ海もなし

10年プロジェクトでは、他にも知床半島の先端部や中央山間部の利用と保全、半島基部の農地における野生動物対策、地域内外の普及啓発活動といった施策を掲げています。私たちは、絶えず変化する社会情勢に応じて舵を取りながら、より良い知床の未来を目指すための羅針盤として、このプロジェクトを推進しています。

10年プロジェクトは、知床財団だけで実現できるものではありません。私たちは、社会と自然、様々な人を結ぶ架け橋として、斜里・羅臼両町、関係機関や地域の方々、全国のサポーターのみなさまと共に知床の未来を創り上げていきたいと考えています。

事務局  
局長  
高橋誠司

For the Future!